

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370104855		
法人名	社会福祉法人 リデルライトホーム		
事業所名	グループホーム カムさあ		
所在地	熊本県熊本市龍田陳内3丁目37-7		
自己評価作成日	平成29年10月15日	評価結果市町村受理日	平成30年1月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成29年11月10日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当法人は社会福祉法人リデルライトホームが運営している。カムさあは、小高い山の上であり、新興住宅地でありながらも自然も豊かにあり居場所としてはより良い環境である。室内は全てバリアフリーになっており、洋室9室の1ユニットで運営している。基本運営理念として「その人らしく」「自己決定」「自己実現」「だからも拘束されない」などを掲げ、その方らしく生きることのできる施設運営に取り組んでいる。我が家のようにくつろげ、最後までその人らしく生きることを支援しながらも、ご家族の絆を大切にすることをケア理念にしています。ご本人のペースで自分らしく暮らしていただけるよう、主治医と連携を図りながら、ご希望があれば看取り介護の実践にも取り組んでいます。併設施設に児童の放課後等デイサービスがあり、知的しょうがい者の施設に昼食を委託している。入居者も支援される一方ではなく、児童を見守り支援する側の役割も持ってもらうことで世代間での支え合いが可能となる。どのような障がいがあっても住み慣れた地域で最後まで尊厳のある暮らしができるよう支援して参ります。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開所から10数年法人の理念を継承し、グループホーム本来の地域密着型事業所としての役割を担いながら運営している。平成28年に開設した学童の放課後等デイサービスは入居者の生活に新たな風を吹き込み、子供の帰りを心待ちにされるなど相乗効果をもたらしている。廊下で繋がった事業所に足を運ぶと、所狭しと飾られた子供の自然で見事な絵画や手作りの作品が入居者の目を楽しませている。老若男女、障がいがあっても同じ場所で助け合い、互いを尊重し高め合う精神が息つき、管理者の言う「地域共生」の道を歩いている。家族からも信頼の厚いホームは、入居者の最終までを支えており、看取り指針一つにしてもわかりやすい文章と文字にて表記するなど細かい配慮がなされ、細部に亘る心使いにホームの姿勢が感じられる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は、職員が日々目にするよう掲示しているが入居者個々の暮らし方の多様性を理解し、生活の中に自己決定できるように支援している。また、理念の共有を意識づけるため話合いの場を設ける必要がある。	開所時に作られた理念は、個々の人生を尊ぶホームの象徴として職員の中にしっかりと定着している。管理者は職員の入職に際し、理念を通じてホームの姿勢を示しながら、日々の生活の中で継続していくよう導いている。「どこかで花を見つけたら、摘んで飾る」よき伝統を大事にしながら、入居者に向き合う様努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	熊本地震の際は地域のみなさんの避難支援や物資の共有など、災害時お互いに支援することができた。年2回の消防訓練には地域消防団や自治会長・民生委員の方々にも参加してもらい日頃から交流に努めている。	棟続きに児童の放課後等デイサービスを開設したことで、新たな風を吹き込み、学校帰りの子供たちからもたらされる情報は、入居者に楽しみな日課となっている。これまでの地域交流も引き続き実践され、有事の際の地元消防団との連携や認知症啓発活動にも力を注いでいる。今年も地元神社の参拝時には、甘酒を用意してもらおうなど、長年の交流が続いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近年、高齢社会を見据え、地域の児童や園児に向けて認知症の理解や支援を実施している。龍田小学校・龍田西小学校には授業を通じ、近隣のさつきヶ丘保育園とは芋ほり交流会等で認知症の方への接し方やケアの方法を話し合う場を設けている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、自己評価・外部評価を配布し、職員が回答した内容や課題を項目別に報告している。また、率直なご意見をお聞きできる良い機会であると共に、ご意見をサービス向上に活かす取り組みならびに、内容改善のため職員間の情報共有・実践を徹底する。	推進会議には包括や地域の代表者の他、入居者やその家族が参加している。毎回行われるパワーポイントを使った活動報告は、参加者にわかりやすく、入居者の生き生きとした表情や普段の何気ない様子からホームでの暮らしぶりが紹介されている。地域と共に歩むオープンな取組が人々に支えられており、様々な情報提供や行事協力などホーム運営に活かされている。	管理者は「運営推進会議は、様々な角度から見てもらうことが有難い場所である」と感謝を語っている。今後も地域との関係構築やホーム運営に活かされる場として回を重ねていただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議開催の際、地域包括支援センターの職員に参加していただくと共に、運営に関することは、熊本市役所の担当者に確認するなど、気軽に相談にのっていただける。又、介護サービス支援員の方に月1回来て頂き、サービス向上に努め頂戴した意見は運営推進会議でも改善内容について実施した結果を報告している。	包括からの運営推進会議への参加により、ホームの現状を発信し、情報を交換している。管理者は必要があれば直接行政へ出向き、担当者と顔を合わせながら会話するよう努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人全体で身体拘束を行わない取り組みの実践をしている。3ヶ月に1回開催される身体拘束廃止委員会の中で、身体拘束が事業所で行われていないかお互い確認をして、法人全体で身体拘束がないケアを行っている。また、定例的な勉強会を行い、安全に暮らすことができる環境づくりに努めている。	法人全体で拘束0への取り組みを継続しており、職員は全体研修や勉強会で更に認識を深めている。入居者を主体とした生活の中で、縛りや職員の言動が及ぼす影響について共有する機会を持ち、安心して暮らせる環境を整えている。職員は腰を下ろし、その方の目線で会話をしたり、手引き歩行等自然体の姿が確認された。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員会議や施設内外研修会で虐待について学ぶ機会を定期的に設けている。日常的には、虐待のポスターを日頃職員が目にする場所に掲示し、職員間同士で言動の指摘や入浴時のボディーチェックを行う体制になっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員会議や施設内外研修会で虐待について学ぶ機会を定期的に設けている。日常的には、入浴時のボディーチェックを行い、外傷がないか皆で確認する体制になっている。また、言葉の虐待については、職員間で注意するよう日々心がけている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に、十分な説明を行うように努力しているが、一度に多くのことを説明させていただいたため、契約後も疑問点やご不明な点がないか、お伺いするよう心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者やご家族からのご要望についてはお話を良くお聞きする体制にしているが、ご家族の心理状況から率直な意見を述べにくいように思う。その方らしい生き方がケアに反映できるよう、自己評価を基本に外部評価や運営推進会議などを活用させてもらい開かれた施設運営を今後も努力する。	面会時や運営推進会議などで家族が自由に発言できる環境を整えている。来訪時には近況を伝えたり、掲示された活動の写真を紹介しながら、質問や意見等を聞き取っている。入居者の意見は普段のやり取りから引き出し、スピード感をもって対処するよう心掛けている。外部の相談窓口についても、入居時などに説明している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常的に職員の意見を聞く機会を設けている。環境次第で職員の意見が出なくなるので、意見を言いやすい環境づくりに常に心がけている。管理者は、代表者と事業運営について意見交換する機会を月に1回以上設け運営に反映させて努力をしている。	職員が普段から意見を出しやすい職場環境に努めている。管理者による面談やストレスチェックにより、心身の状態を把握し、安心して業務に付けるような体制をとっている。また、キャリア別研修や、法人内交換研修等職員のスキルアップを目指している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	やりがいや向上心を持つことができる、施設内外の研修会の他に、キャリアに合わせたキャリアアップ研修を各段階に合わせ開催し、給与については、1年毎の昇給や夏季休暇・冬季休暇・年休・産休や育児休暇など取りやすい環境になっている。また、職員個々のワークライフバランスによる働き方の希望もできるだけ受け入れるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員教育は法人としての大きな課題でもある。職員対象の研修会を幅広く設け、職員の学ぶ意欲を引出し、資格取得に導くよう今後も努力する。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域行事に参加したり、地域行事を通じた交流もあり、子ども避難所の指定をもらっている。また、地域密着型サービス連絡会や龍田校区介護事業所連絡会等に所属し、職員が気軽に研修会や同職種の交流に参加できるように取組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居初期はできるだけ安心して過ごしていただけるよう話しやすい環境をつくり、できるだけ傍で話が聞けるようにしている。ご本人の意見を尊重し、安住の場となるようこれからも努力していく。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	安心してご家族をご入居いただけるよう、不安や要望等を気軽に意見を出せる、より良い関係の構築に努力している。また、ご家族の話にも耳を傾け、その方らしい生き方ができるよう今後も務める。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	その方らしく生活していただけるよう、必要とされる支援は、他サービス利用も含め、必要とされる支援に優先順位をつけながら、実施できるように努力している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個々の個性や持ち得る力を発揮できるような関わり方を常に行っている。共に過ごすことで信頼関係を構築し、それぞれが生活の中に役割をもつことができる関係づくりを心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人にとって家族は大切な方であることを職員は理解している。面会時は、ゆっくり過ごしていただけるよう日頃よりご家族の絆を大切にできるよう心掛けている。また、近況をご報告し、ご要望を聞きながら共に支える関係を努力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	職員は、ご本人がこれまで大切にしていた方や場所を断ち切らないことを理解している。また、大切な物や気持ちも途切れないような環境づくりを心掛けている。また、機会があれば、出かけていけるよう、ご家族にも協力いただき支援の継続に努めている。	家族の面会が多いホームであり、来所時には入居者とゆっくり過ごしてもらうよう配慮している。更にこの一年は入居者にとって放課後等デイサービスの子どもの帰りを心待ちにする日々となっている。畑での野菜作りや恒例行事の門松作り、近隣の散歩など馴染みとなった活動も生活の一部となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者の関係性を理解した上で、入居者同士が関われるようにしている。席の位置や家事の内容を工夫してより良い関係が気付けるようにしている。また、職員が間に入り話題づくりにも心掛けている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご利用が終了しても関わりを継続できるようにしている。出会えたご縁を大切にご本人やご家族の相談内容に耳を傾け、出来ることを職員で考える姿勢を継続している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の会話を通じ、ご本人の希望や意向読み取れる内容を見逃さず、職員間で共有でき、希望に沿った生活が送れるようケアの実践を行う。また、ご本人の意向が確認できない場合は、ご家族と相談しながら生活の在り方を検討し、より良き暮らし方を探究する。	開所当時からの入居者もおられる中、職員は普段の生活に寄り添い、思いを収集しながらプランに繋いでいる。表現困難な方にはその表情やしぐさから汲み取り、家族の思いも尊重しながら本人の気持ちに最良の方法で支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	その方らしく生きていただくために、これまでの生活内容を理解し、その方に合った暮らし方を基本に各職員が収集した情報が活かせるよう支援に努めたい。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の記録表を24時間表を活用していることで、食事・睡眠・排泄・余暇の過ごし方・リハビリ等を時間を軸にして記録するようにしている。3カ月毎にモニタリングを実施することで、現状の把握に努めるチームケアを実践している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	課題解決に向け情報収集及びカンファレンスを行い、ご本人の状況や気持ち・ご家族に意向を踏まえ、ケアマネジャーを中心にモニタリング及び介護計画の変更を行い、介護計画に沿ったケアをチームで実践できるよう今後も努力する。	入居年数が長くなられた方にも、短期間でのアセスメントにより現状に即したプランを全職員で立案している。介護計画作成担当者はプランの意義や本人・家族の思いをどの様に把握していくかなど伝える機会をもっている。家族へプランの説明を行う際は、意見を聞きながらわかりやすく進め承を得ている。中には入居者自身で署名される方もおられる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	気づきや変化は個別記録に記載するようにして、情報の共有を行っている。また、日々ケアに反映できるように申し送りを活用し、実践に活かせるよう努力している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人やご家族に必要なニーズについては、柔軟に対応できるように、全職員が心がけ多方面から検討するようにしている。また、幅広い支援がご本人にとってより良いと考えている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者の重度化により、ご本人の力を引き出す生活より、安全を守る生活が主体になっている。地域の資源を活用するということは、地域の方に入居していただけるように今後も地域に貢献してゆきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	個々の主治医との連携を密にすることで、安心して医療が受けられる支援を行っている。また、病院受診の際、必要があればご家族と共に職員が付添いの確かな情報提供及び情報の共有ができることで適正な医療が受けられるよう今後も支援する。	本人・家族の希望するかかりつけ医を往診や受診により支援している。受診は家族やホームでも柔軟に対応しており、相談事項にはその都度応じ適切な医療支援に繋げている。表情や食事・排泄など職員は日常の支援の中で、健康を管理しており、水分摂取も緑茶や紅茶、コーヒー、乳飲料等入居者に応じて提供している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護体制は専任の看護師を配置している。介護職員と同じ日々の関わりをしてもらっていることから、職員の信頼も高く、早期の気づきであっても随時、相談できるような体制が図れている。また、24時間体制で連携が図れるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された場合は、出来るだけお見舞いに行き、入院中の状態も把握できるように心がけている。このことにより、早期退院がスムーズにできるように職員全員で協力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期については、ご家族のご意向を十分に聞き、緊急時の対応や主治医との連携を図れるように、細心の注意を図りながらチームで支えることができる体制を設けている。	本人・家族の意向を十分受け止め、主治医との連携を図りながらホームに出来る終末期支援が行われている。実際支援に入る際は、医師より医療に関する方針の説明やホームの方針や体制を改めて伝えて納得のもと実際の支援に移っている。管理者は日頃の支援の重要性を語る中で、求められていることに気づいたら、可能な限り対応していくことがホームの役割であると伝えている。	人生の先輩である入居者の最終の時間を支えることに、誇りをもって日々のケアにあたっている。また、放課後等デイサービスに通う児童も、普段から元気のおすそ分けを行っており、高齢の入居者にとっては何よりの時間と思われる。今後も利用者・家族に最良の時間を提供するホームとして活躍していきたい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応は研修会等で勉強できるようにしていると共にマニュアルを作成もしている。しかしながら、職員が緊急時となった場合の実践力に不安を抱えている。そのため、今後も勉強会を含めた学ぶ場を多く設け、不安除去に努めたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回に消防訓練を定例化している。地域の自治会や地域消防団と連携しながら実施している。また、防火意識を全職員で持ち、定期自己点検や、屋外の可燃ごみの放置などがないように放火対策にも注意している。法人内で3ヶ月1回防災対策委員会を開催。予期せぬ災害に適正に対応できるよう日頃より備蓄や物資の備えなども委員会と共有している。	地域の自治会や消防団と連携を図りながら年2回の消防訓練の実施や普段から協力体制を築き、有事に備えている。訓練は運営推進会議と合同でも行っており、反省会までを流れとした内容は写真付きで記録に残されている。昨年の熊本地震ではホームに大きな被害はなかったものの、日ごろから安全管理に意識をもって取り組んでいる。また、法人内の防災対策委員会が3か月に1度開催されており、知識や備蓄の確認などに取り組んでいる。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その方生きてこられた人生を理解し、尊重を持って寄り添えるケアの実践に勤めている。プライバシーや言葉遣い・態度について定期的に研修会を設けているが、常に一定の質を保つことは難しく、出来るだけ個人の尊重ができるケアの実践に勤める。	デンマーク語で『「ようこそいらっしやい』を意味するホーム名カムさあは、開設時から「愛と奉仕の精神」の理念のもと、ご縁の合った入居者のこれまでを大切に支援が行われている。排泄・入浴・食事・外出・居室環境など、一つひとつの支援における尊厳やプライバシーへの配慮について、全職員が認識を共有し業務にあたっている。運営推進会議の資料としても使用されている。入居者の日常を写した写真からも、穏やかな時間が伝わってきた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人の気持ちを表すことが出来るようにケアの在り方を、表情・言葉に耳に傾けるようにしている。職員が押し付けるのではなく、ご本人が実践できるようなケアに努めたい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	心身を安定した状況に保つためにできるだけ規則正しい生活が送れるように支援している。食事時間などは決まっているがそれ以外は出来るだけその方のペースで柔軟に対応するようにしているがケアは合理化できないので全て行えている訳ではない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節ごとにご家族にご協力いただき、おしゃれできるように支援している。また、入居者の理美容や入浴後のスキンケアにも気を配っている。その人らしさの一つに身だしなみがあると思う。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は楽しみの時間であることを職員は理解している。個々の能力に合わせた役割を担っていただけるようお声かけをしている。食事の盛り付けや準備にも参加していただけるように楽しむ支援になうように心がけている。	献立や盛り付け、食事の雰囲気、また、入居者に出来る関りなど、食への楽しみが持てるよう、職員は工夫している。調理は同建物内にある多機能型支援センターが中心に行っているが、ホームとの連携が図られ、入居者も厨房職員と顔なじみの関係となり、毎日の食事を楽しみにされている。また、共用型デイサービスに通われる方の希望を取り入れ、利用日は大好きなカレーの日としたり、苦手な食材には代替えを準備するなど、個々の嗜好へも対応している。	知恵の伝授として放課後等デイサービスの児童との活動(畑作業、干し柿やスイカ・きゅうりの漬物作りなど)は、まさに入居者の経験が活かされる食への関りである。また、デッキのブドウ棚は今年大粒の物が実り収穫後はおやつとして楽しまれている。今後も入居者に楽しい食への関りを支援していきたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食生活は、身体づくりの基本になるため、過度なカロリー摂取を避け、栄養のバランスを考慮した食事の提供を行っている。飲み物は、数種類用意し、一日1500ml摂取を目標に支援している。内容については記録に残し継続的支援ができるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、必ず個々の能力に合わせた口腔ケアを実施し、異常の早期発見に努めている。重度化に伴い、ガーゼを手に巻き口腔ケアをおこなうようにしている。口腔内の確認を行い、トラブルがあった場合は歯科につなげている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中は全員トイレに誘導するようにしている。重度化に伴い1人で移乗させれない場合は、2名で対応するようにしている。トイレで排泄できることが、尊厳の保持に繋がると考えている。	トイレでの排泄は尊厳の保持に繋がることから、日中は全員トイレに誘導しており、夜間も基本的にトイレでの排泄を支援している。夜間のみ使用されるポータブルトイレについては、洗浄を徹底し昼間はデッキで天日干しされている。また、トイレ内も次亜塩素酸を濃度で使い分け、清潔に管理することで気持ちよく排泄ができるようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	高齢になると運動量が減り便秘になりやすくなるそのことを職員は理解した上で、食物繊維を多く含んだ食事や乳製品・青汁・水分を多く摂取していただけるように努力している。それでも改善できない方は、定期的に下剤を使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴回数は週2回以上としている。入浴がお好きな方は入浴回数を増やして対応している。また、安全確保の観点から職員が2名で対応する入居者の場合、ご本人の希望通りに入浴することは難しい。そのため、曜日を決めて対応している。職員と会話を楽しみながらの入浴や入浴剤の活用等で入浴を楽しんでいただける工夫をしている。	入居者の身体状況に応じた職員体制で、週2回以上の入浴を支援している。浴室の入り口には大きな目印の暖簾が下がっており、入浴の気分も高まるものである。脱衣所や浴室は清潔や整頓を心掛け、冬場は特に室温管理に努めヒートショックや億劫にならないように配慮している。職員は浴室への行きかえりの際も、その方に応じた話題や質問などを投げかけ誘導しており、入居者の安心した笑顔が印象的であった。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の体力に配慮し、休息のタイミングを調整している。できるだけ、日中活動を増やし昼夜逆転にならない程度のお昼寝を取り入れ疲労回復に努めている。寝具を天日干しし、できるだけ快適な睡眠になるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員が薬の内容を把握するため、個々の薬事情報をファイルし、どのような薬を飲まれているか理解できる仕組みをつくっている。また、誤薬のないよう職員全員で取り組んでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	全員で外出することは数年前より行っていないが、個々の性格を理解し、役割や楽しみごとの支援をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日常生活の中で社会とつながり、充実した人生を送っていただきたいと職員は理解している。ご家族と協力して外出することもあれば、ご家族が支援してくださる場合もある。地域行事にも参加することもあり、社会とつながり続ける支援をしている。今後も屋外へ外出することができるよう支援する。	入居者が社会との繋がりを大切にしたい外出支援に取り組んでいる。季節を味わう機会、入居者同士・職員とのコミュニケーション、気分転換、体力保持など一人ひとり希望やその方に必要な外出を地域資源の活用や家族の協力を得ながら取り組んでいる。地元神社への初詣、庭先で地域の方との餅つき会、家族との外食など入居者の笑顔を引き出す外出支援である。建物内に放課後等デイサービスが開所してからは、手をつなぎ散歩やデッキでの外気浴など、一つ屋根の下ならではの外出を楽しまれている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理は個々の能力とご家族との話し合いで支援している。ご家族の協力が不可欠で、外出した際は、お金が使えるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	職員は、ご家族や大切な方に対する入居者の気持ちを理解した上で、電話や手紙でのやりとりが出来る支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居心地の良い空間づくりを心掛けており、室温・湿度にも気を配っている。リビングには音楽をかけ心地よい環境にしている。また、玄関やリビングには季節のお花を活け季節感を感じれるようにしている。	入居者が寛げる空間となるよう玄関や通路の棚や洗面台など、敷地内に咲いたものや職員の持ち寄った草花が小瓶に飾られている。ホーム内は回廊式になっており、どこからも眺められる中庭の樹木は季節によって彩りが楽しめる。リビングではそれぞれがお気に入りの場所で過ごされており、テレビが設置されていなくても、新聞を広げたり、歩行訓練を兼ねて廊下を歩く方など、自分の時間を大切に過ごされている。温湿度管理や換気なども季節や状況に応じて取り組んでおり、あらゆる面から居心地の良い工夫がなされている。	ホーム内は華美な飾りつけは控え、日常の生活を写した写真の掲示や職員自身が大切な環境として日々のケアに努めている。以前の入居者がクレパスで描いた四季の作品は大切に廊下に飾られ、入居者や来訪者も目を引くものである。また、職員にとっては初心に返る導となっている。今後も職員の特技やアイデアを活かしながら、居心地の良い空間作りに取り組んでいきたい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにはタイプの違う椅子を用意し、雰囲気を変えくつろげる空間や入居者が思い思いに過ごすことのできる居場所づくりを心がけている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご本人の馴染みの家具を持ち込んでもらい、落ち着ける居室づくりに取り組んでいる。物の配置はご家族と相談した上で決めている。個人のプライバシーが保たれる居室になるよう今後も努力してゆきたい。	管理者は入居時に馴染みや安心できる品々の持ち込みとともに、ホームと一緒に環境作りを行って欲しいと伝えている。家族の写真や書道など趣味の作品をはじめ、使用していた家具など、どの部屋もその方これまでや家族の思いが詰まっている。入居生活が長くなっても、また、家族が遠方におられても、どのような環境を望まれているのか、職員は日頃の関りから十分把握しており、居室に出入りされる入居者の表情からも安心できる自分の部屋となっていることが伝わってきた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々の力を理解し、わかる工夫やできる工夫をしている。わかる工夫として、日めくりカレンダーやタンスへの表記の実施。できる工夫として、手すりを整備しバリアフリーにすることで建物内を自由に過ごすことができるように工夫している。		